

アジア文化論 II : 東南アジア古典文化論 ver2.4

アンコール王朝

- ・ アンコール : *angkor < nagara* (都)
- ・ クメール人の王朝の首都、トンレサップ湖の北岸
- ・ 恵まれた自然環境による高い食糧生産力
- ・ デーヴァ・ラージャ (神=王) 思想による強力な王権
- ・ メコン河流域を拠点にしたタイ湾をめぐる交通の支配
- ・ 9世紀初頭から15世紀中頃まで。ジャヤヴァルマン7世治世に最盛期

《アンコール期以前》

■ 600年頃-800年頃 真臘 (Chenla) 王国

- ・ ヒンドゥー教、とくにシヴァ神信仰、リング崇拝。土着の信仰と接合
- ・ 初期王都シュレーシュタプラ (Shrestapura). 現在のワット・プー寺院遺跡 (ラオス、チャンパサック県)。
- ・ サンスクリット、南方ブラーフミー系文字による記録
- ・ メコン川デルタ地域は一時ジャワの勢力下だったと推定される (シャイレンドラ王朝?)

《アンコール期》

■ 802年 ジャヤヴァルマン2世「世界の王」宣言

- ・ ジャワの支配から独立、クメール王国の再統一
- ・ デーヴァ・ラージャ (*devarāja*) 儀礼
- ・ 王はシヴァ神と同一視され、リング (*linga*) によって象徴される

■ スールヤヴァルマン2世 (1113-45年) : アンコール・ワットの建設

- ・ アンコール・ワット : *Angkor Wat* (王都+寺院)
- ・ ヒンドゥー教寺院として建立、ヴィシュヌ信仰、一辺 1.3km × 1.4km
- ・ 『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』の浮き彫りなど
- ・ その後、16世紀に仏教寺院に改修、本堂のヴィシュヌ神像が仏像に置換される
- ・ 1632年、日本人森本右近太夫一房が参拝 (インドの祇園精舎と勘違い)

■ ジャヤヴァルマン7世 (1181-1201年) : アンコール・トム建設

- ・ アンコール・トム : *Angkor Thom* (王都+大きい)
- ・ ジャヤヴァルマン7世は大乗仏教を信奉、自らを観世音菩薩に描く
- ・ 一辺 3km の堀と高さ 8m の城壁に囲まれた方形の敷地
- ・ 中心にバイヨン寺院 (トンレサップ湖でのチャンパーとの水上戦を描く)
- ・ 王の死後、仏教からヒンドゥー教へ回帰 (仏像の破壊の痕跡)

■ 1296年 中国元朝の使節の来訪 周達観『真臘風土記』

- ・ 上座仏教とヒンドゥー教 (シヴァ神への信仰) が共存
- ・ 14世紀後半以降、タイ人の王国が攻勢

■ 1432年 タイ人のアユタヤ朝、アンコールを攻略

- ・ クメールの王都はプノンペンに移動 (以後、カンボジアとして知られる)
- ・ アンコールの文物をアユタヤに移送 (アプサラ舞踊も)
- ・ 古典的インド文化はアンコールを経由してアユタヤ王朝に受容される。
- ・ 『ラーマーヤナ』はクメールの『ラーマキルティ』を経てタイの『ラーマキエン』に
- ・ バラモン僧による王の即位儀礼

参考文献

石澤良昭『東南アジア 多文明世界の発見』(興亡の世界史 11) 講談社. 2009.

周達観・著、和田久徳・訳注『真臘風土記 アンコール期のカンボジア』(東洋文庫) 平凡社. 1989.

藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱』めこん. 2008.



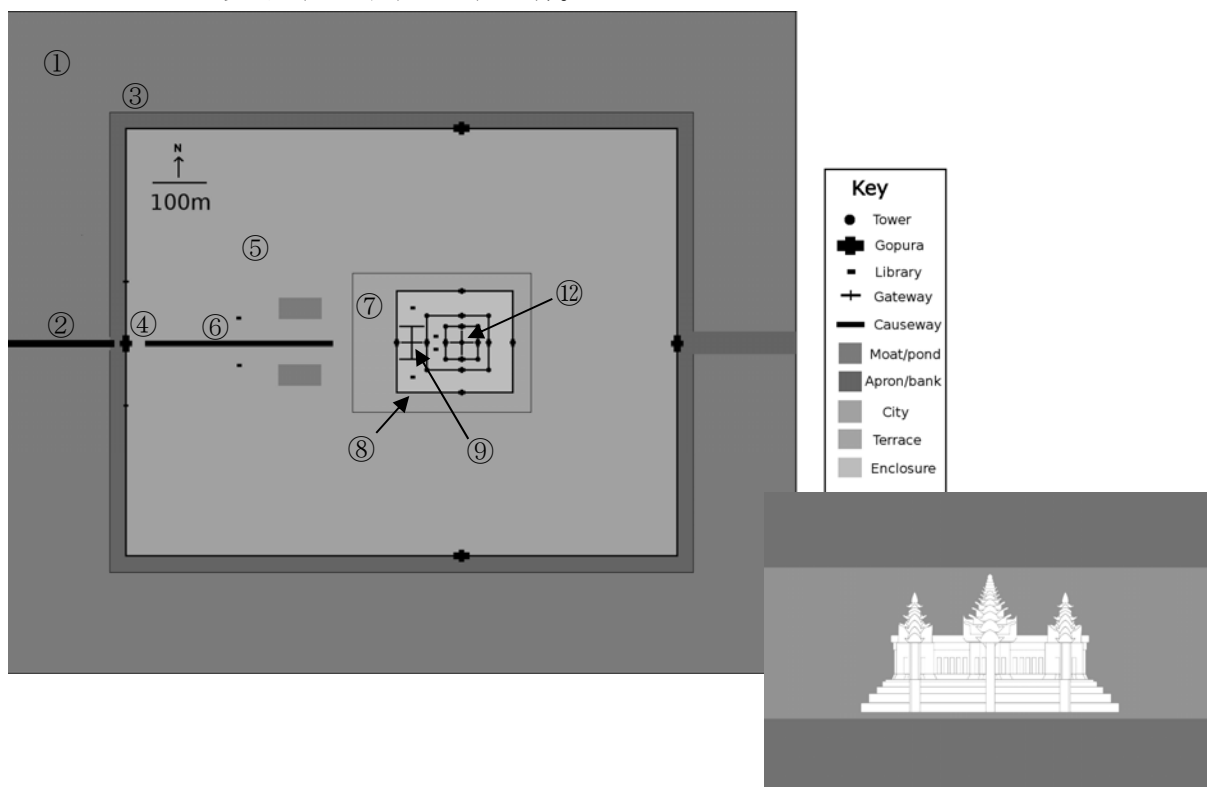
図1 (左) カンボジア
 図2 (下) アンコール全体
 ① アンコールワット (寺院)
 ② アンコールトム (王都)
 ③ 西バライ (人工池)
 ④ 東バライ



アンコール・ワット：angkor < nagara (都)

12 世紀前半、スールヤヴァルマン 2 世の建立。ヒンドゥー教の寺院。

1. 環濠：東西 1500 メートル、南北 1300 メートル、幅 200 メートル。
2. 参道：西から進入。石橋で環濠を渡る。欄干はかつて「乳海攪拌」の場面を描く。
3. 周壁：東西 1030 メートル、南北 840 メートル。
4. 西大門：南北 230 メートル。三塔形式。中央に王の門、左右に二つの門。南北には階段が無い象門が二つ。
5. 前庭：中心に参道。その南北にそれぞれ経蔵と聖池。
6. 参道：前庭中央を西から東へ直進。ナーガ（大蛇）の欄干をもつ。
7. 内苑：三重の回廊、中央に祠堂
8. 第一回廊：東西 200 メートル、南北 180 メートル。
 - 西面南：マハーバーラタの場面。左から攻めるパーンダヴァ族と右から攻めるカウラヴァ族の軍。
 - 西面北：ラーマヤナ場面。とくにラーマ王子たちがランカー島で魔王ラーヴナと戦う場面。王子の顔は建立者スールヤヴァルマン 2 世の似姿。
 - 南面西：「歴史回廊」。行幸するスールヤヴァルマン 2 世とそれに従う王師、大臣、将軍、兵士など。
 - 南面東：「天国と地獄」。上段に天国、中段に閻魔大王らと裁きを待つ人々、下段に地獄を描く。
 - 東面南：「乳海攪拌」。神々と阿修羅らが大蛇ヴァースキを引っ張り合って、マンダラ山を回して海を攪拌。
 - 東面北および北面：後の 16 世紀頃に増補。クリシュナと怪物バーナとの戦い。
9. プリヤポアン（千体仏の回廊）：第一回廊と第二回廊の間を結ぶ十字回廊。南北に経蔵。森本右近太夫一房の墨書。
10. 第二回廊：第一回廊から 17 段の石段を登る。東西 115 メートル、南北 100 メートル。石畳の中庭に第三回廊と祠堂がそびえる。第二回廊の四隅に祠堂（プラサート）。
11. 第三回廊：高さ 13 メートルの急勾配の石段を登る。一辺 60 メートル。四隅と中央に須弥山を模した祠堂。第三回廊に囲まれて田の字型に四つの中庭。
12. 中央祠堂：高さ 65 メートル。かつてヴィシュヌ神を祀る。現在は、四体の仏像。各所にアプサラスまたは女神（デーヴァター）の像。



東南アジア古典文化論 2014-S1

DVD「Discovery Channel 密林の至宝 アンコールワット」コメント

氏名 _____ 学生番号 _____

1. フランスは植民地支配をしていたカンボジアの遺跡をどのように見ましたか？また、どのように取り扱いましたか？
2. ポルポト政権はアンコールの遺跡をどのように見ましたか？また、どのように取り扱いましたか？
3. 現在の地元の住民はアンコールワットをどのように見えていますか？また、どのように取り扱っていますか？
4. 歴史的な遺跡が現在まで伝えられ、そして、未来へと伝えられていくためには、どのような努力が必要だと思いますか？
5. 映像資料を見て気づいたことを自由に書いてください。